

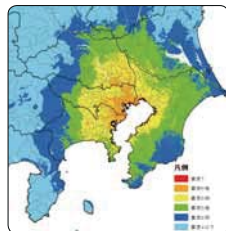
災害に強い「まち」、強い「くに」とは…？（その１）

災害のことを みんな知っている？

災害に強い「まち」「くに」をつくるためには、みんなが「災害があることを知ること」「災害が起こったら、どうなるのかをイメージすること」が必要。これができれば、まずは誰でも、「逃げること」**自助**ができるようになります。

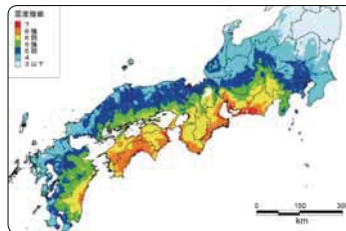
■代表的な巨大地震：「南海トラフ巨大地震」と「首都直下地震」

●首都直下地震が想定されているエリア。首都直下地震は、日本の政治・経済の中心である首都圏を直撃する巨大地震で、30年以内に7割の確率で起こると科学的に推定されている。被害規模は最悪で死者2万人、経済被害96兆円（日本のGDP（年間の経済規模）の約2割）と想定されている。



首都直下地震で
想定される震度分布▶
[出典：首都直下地震対策検討ワーキンググループ最終報告（内閣府）]

●南海トラフ巨大地震が想定されているエリア。大津波も発生し、最悪で死者32万人、経済被害220兆円（日本のGDP（年間の経済規模）の4割超）と想定されている。30年以内に7割の確率で起こると科学的に推定されている。



南海トラフで
想定される震度分布▶
[出典：南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ第二次報告（内閣府）]

考えてみよう ▶ どうやったら、いろんな人に知ってもらえるだろう？

建物が 地震につよい

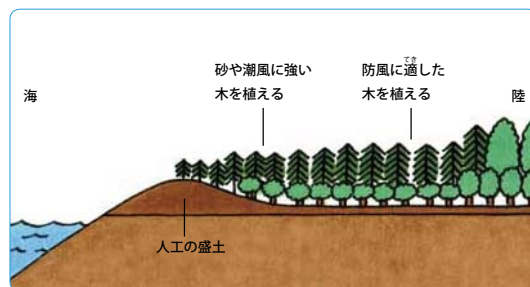
みんなの家やビル、駅や工場などが、地震に強いものなら壊れません。建物を持っている人、個人や会社や政府が、それぞれの建物を「地震に強いもの」にするための工事を行います。**自助** & **公助**



考えてみよう ▶ どうすれば、そんな工事をいろんな人にやってもらえるだろう？

水辺に「まち」をまもる 堤防がある

海岸や川辺に堤防をつくれば、津波・高潮や洪水を防ぎ、「まち」を守ることができます。コンクリートの堤防だけでなく、「緑の堤防」も考えられます。**公助**



緑の堤防（土を積み上げ、その上に木を植える、自然の堤防）

考えてみよう ▶ 堤防を考えると、どんな注意が必要だろう？

津波から逃げる 「場所」と「訓練」

周囲に避難する高台がない場所には、津波から逃げられる場所を作ります。**公助** 「津波タワー」は、そんな避難場所の典型例。そして、人々はいつも、いつ津波が来ても逃げられるように訓練を重ねます。**自助** そして、体が不自由な人や高齢者など自力での避難が困難な人たちが逃げられるよう皆で手伝ったり、誰もが逃げやすいユニバーサルデザインの考え方によるまちづくりをしておくことも大事です。**自助** & **公助**



洪水・土砂から 「まち」をまもるダムがある

たくさんの水をためる「ダム」があれば、大雨の時に一旦水をため、その水を少しずつ流していくことで、下流側の水があふれ出る（洪水）を防げます。また、土石流がおこる「谷筋」に「砂防ダム」をつくれば、下流側の「まち」を、土石流から守ることができます。**公助**



砂防ダム（土石流から「まち」を守る）



チャレンジレベル

色んなものに「スペア」がある

「壊れては困るもの」が壊れれば大混乱に。けれど「スペア」があれば回避できます。例えば…

- **ビジネスの取引先**
工場の「原材料」の仕入れ先が一つだけの時、その仕入れ先が壊れたら生産は全てストップします。
- **自家発電機**
地震の時に電気が止まれば、病院も工場も放送局も止まります。でも、自家発電があれば大丈夫。
- **道路や橋**
道や橋が一本だけでは、それが壊れると逃げることも救援に入ることもできなくなってしまいます。
- **鉄道**
例えば、東海道新幹線が壊れれば、日本経済は大混乱。もうひとつ新幹線が通っていれば、混乱は最小化できます。

〔高速道路のスペア〕

東名と新東名のダブルネットワーク

東京と名古屋を結ぶ東名高速道路は、海沿いの区間が高潮などで通行止めになることが課題となっていました。これを解決するため、地震や津波、高潮の被害が少ない内陸部に新東名高速道路が建設され、一部が供用されています。この新東名の開通により、現在の東名との間で相互に行き来が可能なダブルネットワークが形成され、災害等緊急時の代替路線の確保、避難路・緊急輸送路としての機能が実現します。

